

## 20世紀における『史通』学の回顧 —版本知識・伝承と受容の歴史を中心に—

楊 文 信

はじめに

- 一 『史通』学の研究意義
  - 二 『史通』学の研究史略
  - 三 『史通』学の反省と提案
- おわりに

キーワード：『史通』、史学評論、史学策、  
劉知幾、章学誠

### はじめに

劉知幾の『史通』は中国史学史上において非常に重要な史評類の書物であり、20世紀初頭以来章学誠の『文史通義』と共に大きな注目を受けている。これまでの『史通』研究のほとんどが、唐代の歴史学という視座より、或いはその本の内容及び体裁を分析し、或いは両漢以来の史書との継承または異同点を比較し、或いは劉知幾自身の歴史に関する学問・思想の特徴を究明することに重点を置いていたことに対し、その本の宋代以後における伝承・受容、つまり「『史通』学史」についての専門的な研究は比較的少ない。筆者は、中国唐代以後の各時代の学術・文化・社会との関係をより具体的に考察しなければ、歴史学の発展におけるこの書物の重要性について理解しがたいと考えている。そこで、本稿は中国近世史学評論史の専門研究とし

て『史通』の版本知識・伝承と受容の歴史を究明することを目的としている。

### 一 『史通』学の研究意義

明治三十三年（1900）に、田中萃一郎は「劉知幾の歴史研究法」において、次のように述べた。

『史通』の旧刻本世に伝うるもの極めて稀なりしを以て明の『永樂大典』は網羅すること繁富なりしも独り此書を遺せり……萬曆中張睿父更に陸深の校本に就きて校定を加えて遂に完書となし之を豫章に刻す。是れより以後学者皆な張本を以て祖となす。李維楨は……張本によりて略ぼ評論をなす、郭孔延之に続くに評釈を以てせしもの第二の評釈なり。王惟儉は萬曆二十五年の進士にして山東巡撫の職を勤めし人なり。<sup>1</sup>

この短い文章中に、すでに四つの誤りを見付けることができる。即ち①『永樂大典』は『史通』を実際に引用していること、②萬曆以後の学者は張本を祖となさなかったこと、③郭孔延は李維楨より早く『史通』を評論したこと、④王惟儉は萬曆二十三年（1595）の進士であったこと、である。田中氏の論文はいわゆる「西歐史学の眼で『史通』をとらえようとする」もの

<sup>1</sup> 田中萃一郎「劉知幾の歴史研究法」、『田中萃一郎史学論文集』、三田史学会、1932年所収、347-385頁。

であり、<sup>2</sup>『史通』版本・伝承に関する専門的な研究ではないので、これらの点で彼を厳しく批判するのは、やや酷というものであろう。しかし、版本学の専門家とされている王重民が、『中国善本書提要』で『史通』の萬曆五年(1577)張之象の校訂本(以下『象本』)と三十年(1602)張鼎思の校訂本(以下『鼎本』)を紹介する時、不完全な後者を明刊本として最善であるとして判断したことには驚かざるをえない。<sup>3</sup> というのは、すでに1929年に出版された『四部叢刊』は『鼎本』を『史通』の底本としているが、同書の末に載せてある孫毓修の跋は、『鼎本』について「偽誤尚多」として、卷五「補注」篇の後半が欠けている部分を『象本』によって補訂する、と明白に説明していたからである。<sup>4</sup>

無論、王重民は、あらゆる善本古籍の紹介を志したのであって、その巨大な努力には敬意を払わねばならないし、その苦勞を察するべきである。先に述べたような判断の甘さについてはある程度は仕方がないと言うべきかもしれぬ。それならば、版本や伝承などの諸問題を一切詳細に検討せず、誤謬を犯した『史通』の専門研究者こそ全く弁解の余地がないと言わねばなら

ない。端的な例をいくつか挙げてみよう。

【事例一】逯耀東は「史通疑古惑経篇形成的背景」において、次のように言う、

当尹<sup>マ</sup>亨(筆者案、亨)山読了黄叔琳の『史通訓故補』之後……他建議黄叔琳<sup>マ</sup>应效法韓愈<sup>マ</sup>削荀(子)揚(雄)不合聖經之去(筆者案、処)、刪去「疑古」篇。黄叔琳……最後終於削去「疑古」一卷、「惑経」後的五虚美。<sup>5</sup>

しかし、現在見ることで『史通訓故補』において両篇が刪削されていないのは、一度読めばすぐ分かるにもかかわらず、氏は、黄叔琳が尹嘉銓(字は亭山)の意見に結局従わなかったという事実に注意しなかった結果間違えた、と言わざるをえない。

【事例二】彭雅玲の『史通的歴史敘述理論』は、現存の『史通』の最も早い刻本が陸深のもの(以下『陸本』)で、最も早い明代の注釈本が陳繼儒『史通(訂注)』(実は偽書)及び王惟儉『史通訓故』(以下『訓故』)だ、と述べている。しかし、いわゆる『蜀本』という四川布政司の刻本が『陸本』の祖であったこと、陳繼儒と王惟儉による注釈本が世に出る前に郭孔延『史通評釈』(以下『評釈』)があったことにつ

<sup>2</sup> 劉知幾『史通』和訳本(増井経夫訳)、研文出版社、1981年、増井氏の語、385頁。

<sup>3</sup> 王重民『中国善本書提要』、上海古籍出版社、1983年、147頁。原稿は1939-1949年の間に書かれた。この記載は氏が1945年前後に書いた *A Descriptive Catalog of rare Chinese books in the Library of Congress* 美国国会図書館蔵中国善本書録(Washington D.C.: Library of Congress, 1957)、437-438頁に溯ることができるが、その時彼はまだ北平図書館所蔵の『象本』を読んでいない、という点に注意すべきである。一方、Susan Chan Egan(陳毓賢), *A Latterday Confucian: Reminiscences of William Hung (1893-1980)* (Cambridge, Massachusetts and London: Harvard University Press, 1987、中訳本は『洪業伝—季世儒者洪煨蓮』、聯経出版事業公司、1992年と題す。後にまた1996年北京大學出版社の版本があった。)は『史通』

版本研究の専門家である洪業の話を引用して、“The Chang Chih-hsiang edition (『象本』を指す), by far the best of the extant texts” と言う(172)。

<sup>4</sup> 張鼎思の校訂本は張元濟『四部叢刊・初編(縮本)』、上海商務印書館、1936年(摺1926-1929年版)冊17所収、148・177頁を参照。

<sup>5</sup> 逯耀東「史通疑古惑経篇形成的背景」『当代』、10期、1987年2月、62頁。龔鵬程「史通析微」『幼獅學誌』、20卷4期、1989年10月、31頁は同じ。逯氏は後の「劉知幾史通與魏晉史學—從史通撰寫過程所作的討論」(中央研究院編『中央研究院第二屆國際漢學會議論文集・歷史與考古組』、中央研究院、1989年、517頁)でも「劉知幾的疑古與惑経」(氏の『魏晉史學及其他』、東大圖書股份有限公司、1998年、85-86頁)でも同じ誤りを犯している。

いて把握できていない。<sup>6</sup>

【事例三】増井経夫の和訳本『史通』は、紀昀の『史通削繁』（以下『削繁』）は乾隆三十七年（1772）に刊行された、と指摘しているが、これは紀氏がその年に序文を書いただけという事実に対する誤解である。<sup>7</sup>

【事例四】*Concordance Combinée du Shitong et du Shitong Xiaofan*（史通與史通削繁通検）を著したGuy Gagnonは、浦起龍『史通通釈』（以下『通釈』）と『削繁』とを比較して、後者の刪削を18世紀における政治審査制度の影響を反映した例として挙げている。<sup>8</sup> 紀昀の作業がこのような時代性を持つか否かは別として、刪削された部分のどれが「紕繆」か「冗漫」か、に関する紀昀の解釈がついていない刊本しか利用していない。これでは紀昀がなぜ、そのような刪削を行ったのか判断を下す材料を欠き、果たしてGagnon氏の言わんとする目的を証明することができるかについては、大きな疑問が残っている。もし、氏が洪業（William Hung）の紹介している、紀昀の別の批語を載せる『通釈』（かつ張仁黻の蔵書）が残されていることに注意してこれを利用したら、より価値ある参考書になるはずだ、と思われる。<sup>9</sup>

田中萃一郎とほぼ同時代の学者の中に、早くから『史通』の版本・伝承に注意した内藤湖南がいた。氏は明治四十三年（1910）に北平で『通釈』を購入したが、それより17年後、次の

ような奥書を書いている。

『史通』旧本二種、黄崑圃（叔琳）本出于王損仲（惟儉）本、此本出于郭延年（孔延）本。損仲自記出于張玄超（之象）本、延年亦自記取張睿父（鼎思）本再加校定、張睿父乃再刻陸儼山（深）校本。然余所藏嘉靖時陸本不與王校本合、可疑。若更得張刻本、庶幾此獄可決矣。丁卯（昭和二年）十二月仲七、虎記。<sup>10</sup>

『陸本』とは、かつて程肖莖・張畏堂（鈞衡）の蔵書であった明刊本を指す。<sup>11</sup> 氏が『史通』の理論によく注意を払い、これを高く評価していたのは、なによりも『支那史学史』（特に漢代から唐代までの部分）で、随所に論拠や話題として『史通』を引用していることがその明証であるが、ほかにも、『玉石雜陳・文心雕龍史通十條』（1928年）や、「擬策一道」（1931年）において、劉知幾の史識は鋭く、史学を通論したものの中では優秀なものであり、又、歴史家の流別に関しても議論は詳しい、と賞賛している。<sup>12</sup> 版本の問題について、氏は1928年に、『四部叢刊』本と同系統で、序跋を缺く『鼎本』を備置くべきか否かを躊躇したと言い、自分は『陸本』・『評釈』・『訓故』・『訓故補』・『通釈』・『削繁』を持っているが、もし更に『象本』と内閣文庫の陳眉公『史通注』を見る機会があれば、ほぼ『史通』の今本の来歴が分かるはずだ、と断言した。<sup>13</sup> このように、晩年の内藤氏

<sup>6</sup> 彭雅玲『史通的歴史敘述理論』、文史哲出版社、1993年、18頁。張振珮『史通箋注』、貴州人民出版社、1985年、「前言」、6頁でも、許凌雲『劉知幾評伝』、南京大学出版社、1994年、302頁でも『陸本』をいま見られる最も古い版本としている。

<sup>7</sup> 『史通』和訳本、384頁。

<sup>8</sup> Guy Gagnon etc eds., *Concordance Combinée du Shitong et du Shitong Xiaofan* (Paris : Librairie Adrien Maisonneuve, 1977), 「前言」, 3.

<sup>9</sup> William Hung, "A T'ang Historiographer's Letter of Resignation", *Harvard Journal of Asiatic Studies* 29 (1969), 4の注。

<sup>10</sup> 関西大学図書館（編）『内藤文庫漢籍古刊・古鈔目録』、関西大学図書館、1986年、116頁もこの奥書載せているが、若干の文字が誤っている。

<sup>11</sup> 同前。

<sup>12</sup> 内藤湖南『内藤湖南全集・卷一四』、岩波書店、1969-1976年、48-49・81-83頁。

<sup>13</sup> 同前、書簡の部、昭和三年八月十七日及び十二月二十日田中慶太郎に出した手紙、599・602頁。勿論、本稿が紹介するように、『史通』の刊本と鈔本がそれほど多いので、版本の問題はそう簡単に解決できないと思われる。

はこの問題をより徹底的に研究をしようとする姿勢を見せた。

版本の異同はどの程度『史通』の内容の理解に関わっているのか、という問題が『史通』研究の根本的かつ重要な問題である。『通釈』が出版されて以来、中国の学者に限らず、多くの研究者はその内容を往々うのみにして、それが『史通』に対する注釈の一つでしかなく、『史通』そのものではないことを意識せずに引用してきた。しかし、内藤戊申が言った通り、『通釈』は「皆その釈を『史通』の本文の間へ註の如く割って入れて居る」ので、「読者は不知不識の間に『史通』を浦起龍の解釈に従って読んだ了ふ」という「非常な冒険を冒していることになる」。氏は「六家二体」の例を挙げて、浦起龍の解釈が必ずしも劉知幾の本意と一致しない、と指摘している。<sup>14</sup> 一方、中国大陆の張振珮は内藤氏の論文を読んでいないかもしれないが、同じ顧慮から『史通箋注』（以下『箋注』）の底本を『象本』とした。『箋注』は『象本』の他に、『陸本』や『鼎本』・『訓故』・『評釈』・『史通註』なども参考にしており、かなり信頼できる注釈書と言えるが、より一層多くの版本を収集して（特に時代の古いものや有名な学者の批注を載せているもの）、その誤りを改め、

そのまだ注意しなかったところを補い、更に新解釈の可能性を示すような作業は、『史通』の研究者のみならず、古代から唐代まで多くの分野の専攻者にも関わる問題として重要なものであり、ひいては歴史家として史料を扱う際の自覚をも問うことになるであろう。

『史通』学的全盛期は清代であると思われる。というのは、嘉靖年間から明末まで『史通』本文の校訂と注釈が急速に盛んになり、その数では清代のそれを上回ったが、この時代は次の時代のように、蔵書・注釈・評論・校訂・科挙の受験勉強などの諸要素によって知識人の間に広く読まれることがまだなかったからである。従って、少なくとも清代において、いわんや民国以降、明清時代における『史通』学の発展に関して、版本の紹介を主とする論著はないはずがない。更に言えば、増井経夫氏のように、「いったん古典化した（『史通』の）内容を如何に受容したかは興味ある課題で、清代史学構成の一面を示したものともしえる」という考えに基づいて、この書物が当時の学術ないし社会・文化とどのように関わっていたのか、解明しようとした作業は、事実上皆無に近い。<sup>15</sup> しかし、今日、新たな『史通』版本と注釈本などの基本史料の発現と利用によって、両代『史通』学の

<sup>14</sup> 内藤戊申「史通の六家二体の論に就て」『史林』、22巻3號、1937年7月、70-83頁。一方、曹聚仁（校注）『史通』、梁溪図書館、1926年は「讀史通雜識」で浦氏の注釈の陳腐さを「翻開書来一看、第一篇便讀到『二句首提史字、掲出全書眼目』『数語勒清記言』『数語轉遞』……等等『通釈』。使我幾疑『史通』是劉知幾的闢墨、浦老師替它加些眉評、而讀『史通』的都是鑽文学孔道的人、要從浦老師的『通釈』裏学些文章筆法」、と批判している（1-2頁）。また、1978年上海古籍出版社標点本『史通通釈』の句点上の誤謬に関して、邱敏「史通通釈標点献疑一則」（『古籍整理研究學刊』、1986年4期、1986年12月、46-47頁）を参照。

<sup>15</sup> このテーマに関して、増井経夫には次の著作がある、「史通の伝承」『金澤大学法文学部論集』（哲学・史学篇）、2號、1954年、41-56頁・「明代史通学」『東方

学』、15號、1957年12月、12-20頁・「清代史通学」、東方学会（編）『（東方学会創立十五周年紀念）東方学論集』、東方学会、1962年所収、325-335頁・『史通』和訳本、366-393頁・“Liu Chih-chi and the *Shih-t'ung*”, *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko*, 34 (1978) : 113-162 ; 『中国的自由人の系譜』、朝日新聞社、1980年、120-124頁 ; 『中国の生活と文化』、野原四郎等『中国文化史・近代化と伝統』、研文出版社、1981年所収、68-69頁 ; 『アジアの歴史と歴史家』、吉川弘文館、1982年、79-90頁 ; 『中国の歴史書—中国史学史』、刀水書房、1984年、特に明清史学に関する諸文。引用文は『清代史通学』、329頁。ところが、明清史に関する氏の多くの論説は成立しないと思われる。



具体像をより明白に描くことができるようになってきた。従って、今日の水準から見れば、増井氏を始めとする先学達の所説にも多くの修正補足を要する点があり、又、原物を見ていないために若干の誤謬も犯している。このような理由で、筆者が取り扱っている問題点の一部は増井氏等によっても扱われたものでありながら、互いの立場・状況が同じではないため、結論も多くの点で異なっている。

『史通』学の研究の今一つのねらいは、「中国史学史」ではなく「中国史学評論史」を考察することにある。それは、瞿林東や張三夕・趙俊などの近年の提唱に應えることでもある。<sup>16</sup> 文学史の類の著作がほとんど『史通』に触れないのと異なって、文学批評史の類の著作は常にその議論を紹介してきた、と張氏が指摘していることには注意すべきである。<sup>17</sup> 史学の場合、史学史における『史通』の位置は必ずしも『史記』や『漢書』・『資治通鑑』・『通鑑綱目』などより上位に置かれるはずではないのと異なっ

て、史学批評史におけるその地位はE. G. Pulleyblank が言う通り、専門著作として世界一の古さにある。<sup>18</sup> しかし、『史通』から章学誠の『文史通義』までの千年の間に、史学批評史がどのような発展を遂げたのか、その具体像はまだ明らかになっていない。すでに、内藤湖南は清代史学を論じた際、当時の人々が「史法」の問題にかなり関心を持っていた、と述べた。「史法」とは言うまでもなく史学評論の範囲に属する。しかし残念ながら、『支那史学史』に関する未完成の文章を読む限りでは、氏はただ方苞を代表とする桐城派の義法の学を「史法」の唯一の説明として挙げるのみである。<sup>19</sup> 実は、『明史』の編纂総裁に当たった徐乾学は編纂の際に、他の史官に『史通』の論説をよく検討するよう、とはっきり勧めている。<sup>20</sup> また、清人の文集・筆記を読めば、しばしば「史法」・「史例」に関する文章を見付けることができる。<sup>21</sup> 以上のことを合わせて考えれば、『史通』学の全貌を究明することは、清代史学

<sup>16</sup> 瞿林東『中国史学散論』、湖南教育出版社、1992年；同『中国古代史学批評縦横』、中華書局、1994年；同『史学與史学評論』安徽教育出版社、1998年；張三夕『批判史学的批判—劉知幾及其史通研究』、文津出版社、1992年、「導論」、3-41頁；趙俊『史通理論体系研究』、遼寧大学出版社、1990年、第一章；同「劉知幾対史学批評的反思」、『遼寧大学学报』、1991年4期、1991年7月、17-20頁；同「史通中所見之史学批評範疇」、『江漢論壇』、1992年8期、1992年8月、53-57頁；趙俊・任宝菊『劉知幾評伝—史学批評第一人』、広東教育出版社、1997年、179-183頁；西脇常記「劉知幾—史評者の立場」、『人文』、16集、1984年、47-76頁。

<sup>17</sup> 張三夕前掲書、5頁。林田慎之助『中国中世文学評論史』、創文社、1979年『史通』の論説を引用している(290-293頁)。文学の角度から『史通』を研究するものも無いわけではない。例えば、彭雅玲前掲書7頁を参照。極端な例は、龔鵬程「史通析微」は「他的史学觀根本上乃由他的文学觀發展而來」「他的史学、根本上終究只是他的文学理論、と唱えている(36頁)。この考えと異なって、張三夕「文人與学者的分野—從劉知幾看古人的一種事業觀念」(『程千帆先生八十寿辰紀念文集』編委會編『程千帆先生八十寿辰紀念文集』、江蘇古籍出版社、1992年、122-130頁)は史学こそ劉

氏が重視している事業だ、と述べている。

<sup>18</sup> E. G. Pulleyblank, "Chinese Historical Criticism: Liu Chih-chi and Ssu-ma Kuang", in E. G. Pulleyblank and W. G. Beasley eds., *Historians of China and Japan* (London, New York and Toronto: Oxford University Press, 1961), 135-151.

<sup>19</sup> 内藤湖南『支那史学史』、東洋文庫、1992年、第2冊、260頁。同氏『清朝史通論』、東洋文庫、1993年、第五講も少し史法のことに触れている。

<sup>20</sup> 劉承幹(輯)『明史例案』、世界書局、1961年、巻2、「徐健菴修史條議序」、1下頁。また葉建華「論清初明史館館臣の史学思想」、『史学史研究』、1994年4期、1994年12月、24-34頁を参照。

<sup>21</sup> 二、三例を挙げると、閻若璩『潛邱劄記』(国家清史編纂委員会編『清代詩文集彙編』、上海古籍出版社、2009年、冊141)、巻4上、「修史」、116-117頁、李因篤『受祺堂文集』(『清代詩文集彙編』、冊124)、巻1、「史法」、30-33頁、盧文弨『讀史札記』(統修四庫全書編纂委員会編『統修四庫全書』、上海古籍出版社、1995年から、冊452)、「漢書非失於限斷」条・「附伝」条、117・129-130頁；陳鱣「对策四・史例」、章壽康輯『式訓堂叢書』(光緒三年[1877] 會稽章氏刻本)、冊7、1上-3下頁。

評論史を打ち立てる第一歩として、重要な意義を持つ、と筆者は確信している。

## 二 『史通』学の研究史略

林時民『劉知幾史通之研究』（1987年）・『史学三書新詮：以史学理論为中心的比較研究』（1997年）・張三夕『批判史学的批判—劉知幾及其史通研究—』（1992年）及び彭雅玲『史通的歷史敘述理論』（1993年）の参考文献を合計し、その重複しているものを除去すると、20世紀の間に『史通』を研究テーマとした専門著作（学位論文・注釈・翻訳書を含む）は約16点、雑誌・論文集に掲載された論文は約130点にのぼる（勿論、唐代文化史や中国史学史・歴史文献学などの一章としてのものは含んでいない）。<sup>22</sup> しかし、筆者が調べた限りでは、これですべてではない。少なくともそれら以外にもあり、また当然現時点では、彼ら以降に新たに発表された論文・著作もあるから、さらに専門著作を少なくとも12点、論文を百余点加えることができる。<sup>23</sup> 以下この250点以上にもものぼる論文・著作を基礎として、過去百年における『史通』研究の幾つかの側面を回顧してみよう。

まず、版本研究を概括しておこう。従来「疑

古惑経」のために大勢の学者に非難された『史通』は清末以後、特に民国時代の間に「古史辨」を代表とする疑古の風潮が一世を風靡したことによって、高く評価されることになった。顧頡剛はこの書物を『辨偽叢刊』に編入しようと考えた。<sup>24</sup> 一方、傅振倫の話によると、当時公私立大学を問わず、『史通』を基本教材とする史学史の一科目を設けるのは普通であった。<sup>25</sup> ところが、このような時代背景にもかかわらず、真面目に版本や文字の異同に注意する人は、傅增湘や張元濟・鄧邦述・葉景葵などの少数の蔵書家のほかに、孫毓修「史通札記」（1922年）及び姜殿揚「札記補」（1927年）、羅煌「史通校記」（1935年）、金毓黻「論史通之淵源及其流別」（1939年）、張蘊華「館藏明蜀本史通初校記」（1942年）程度しかなかったようである。孫・姜両氏のものは何焯・盧文弨・顧廣圻などの校訂を利用して、世の好評を得た。羅氏は『陸本』を使用して『鼎本』と対校したが、若干の異同を列挙するに止まっている。金・張両氏はより多くの蔵書家や校勘者の記録を引用しているが、誤りはまだ少くなくない。<sup>26</sup> 彼等とはほぼ同時代の傅振倫は、『劉知幾年譜』（1934年）を著し劉氏の生涯を紹介することに努めたが、版本の問題はこの段階では、まだ取

<sup>22</sup> 彭・張氏前掲書、林時民『劉知幾史通之研究』、文史哲出版社、1987年；林時民『史学三書新詮：以史学理論为中心的比較研究』、台湾学生書局、1997年。張氏は「取精用宏・鉤深致遠—評張振珮史通箋注」（『史学史研究』、1987年1期、1987年3月、66頁）において、80年間に、研究論文は百篇足らず、現代人の完全な注本もない、と言うが、これは正確ではない。

<sup>23</sup> 中国語の論文は主に中国社会科学院歴史研究所魏晉隋唐史研究室編『隋唐五代史論著目錄』、江蘇古籍出版社、1985年、209-212・448-449頁；東北師範大学中国古籍整理研究所・辞書編輯室編『中国古籍整理研究論文索引』、江蘇古籍出版社、1990年、193-194頁；周迅等編『史学論文分類索引』、書目文獻出版社、1990年、16-17頁；張海惠・王玉芝編『建国以来中国史学論文集篇目索引初稿』、中華書局、1992年、46頁；中国歴

史学年鑑編輯組編『中国歴史学年鑑』、人民出版社・三聯書店、1980-1997年の号を参照。

<sup>24</sup> 許冠三『劉知幾の実録史学』、中文大学出版社、1983年、132・226-228頁。

<sup>25</sup> 傅振倫「史通的刊印流传与研究」、同『傅振倫文録類選』、学苑出版社、1994年所収、56頁。

<sup>26</sup> 孫毓修「史通札記」及び姜殿揚「札記補」は共に前掲『四部叢刊』本『鼎本』所収、羅煌「史通校記」『天津益世報・讀書周刊』、17期、1935年9月26日；金毓黻「論史通之淵源及其流別」、『制言半月刊』、54期、1939年7月、2-3頁；張蘊華「館藏明蜀本史通初校記」、『圖書集刊』、創刊號、1942年3月、58-69頁。この論文は後に蒙文通『蒙文通文集・第三卷・經史抉原』、巴蜀書社、1995年所収、441-449頁。

り扱わなかった。<sup>27</sup> 本格的な研究業績は、1950-1960年代に始まり、増井経夫「史通の伝承」(1954年)・「明代史通学」(1957年)・『史通』和訳本(1966年)、傅振倫「史通版本源流考」(1962年)・『劉知幾年譜』の補定版(1956・1962年)、洪業(William Hung)“A T'ang Historiographer's Letter of Resignation”(1969年)などの優れたものが挙げられる。<sup>28</sup> これらの学者の貢献に比べれば、1970-1980年代の莊萬寿「史通著録版本源流考」(1987年)、張新民「史通評釈諸本述略」(1988年)・「史通版本源流考」(1990年)、傅振倫「史通的刊印流伝與研究」(1994年)は比較的短く、研究の広さと深さの点からもあまり取るべき所の少ない論文と言える。<sup>29</sup> ただ、石田肇「無窮会蔵・立原翠軒旧蔵史通評釈について一明末史通学の一端」(1987年)は該会所蔵の『評釈』を主題とするが、日本における同系統の諸版本も参考しており、又、毛俊義「略談陸深蜀刻史通本鑑定」(1985年)は版本鑑定においての顧広圻の誤謬を指摘しており、共に精緻なものである。<sup>30</sup> その他、一字索引として *Concordance Combinée du Shitong et du Shitong Xiaofan* (1997年) も

あるが、殆どの研究者に利用されていない。

次は注釈・翻訳について述べよう。数回の再版があった劉虎如『史通(選)注』(1928年)と異なって、曹聚仁の全注本はより早く(1926年)出版されたが、複製はされなかった。氏は『通釈』・『削繁』の他にいわゆる「萬曆本」をも利用して、互いの異なる箇所を多く見付け、劉虎如の注本より優れているはずであるが、本文では全くそれを説明しなかった。<sup>31</sup> 1930年代から1980年代の中期まで、『史通』の全訳としては、増井経夫の和訳本があるのみであり、むしろ一二の篇章に対する注釈・翻訳の方が多い。なかでも、呂思勉『史通評』「点煩」・洪業「史通点煩篇臆補」(1935年)は共に該篇の原貌を復元しようとする作業である。他に、趙仲邑「劉知幾史通自叙註」(1944年)・程千帆「文論要詮」(1940年代末)・洪業“A T'ang Historiographer's Letter of Resignation”・川勝義雄『史学論集』(1973年)・Stuart H. Sargent “‘Understanding History: The Narration of Events’ by Liu Chih-chi (661-721)” (1982年)はおのおの「模擬」や「敘事」・「自叙」・「辨職」・「忤時」の諸篇について訳注している。<sup>32</sup> ところが、1980年代の

<sup>27</sup> 傅振倫『劉知幾年譜』、景山書社、1934年。

<sup>28</sup> 増井経夫・William Hungの前掲諸文を参照。傅振倫「史通版本源流考」、『図書館』、1962年2期、1962年6月、48-50頁・『劉知幾年譜』、中華書局、1963年、120-124頁。

<sup>29</sup> 莊萬寿「史通著録版本源流考」、『中国學術年刊』、9期、1987年6月、71-82頁；張新民「史通評釈諸本述略」、『文献』、1988年2期、1988年4月、114-120頁；同「史通版本源流考」『中国歴史文献研究』、3期、1990年、150-156頁；傅振倫「史通的刊印流伝與研究」、56-58頁。

<sup>30</sup> 毛俊義「略談陸深蜀刻史通本鑑定」、『四川図書館学報』、1985年2期、1985年4月、62-63頁、石田肇「無窮会蔵・立原翠軒旧蔵史通評釈について一明末史通学の一端」『東洋文化』、復刊59號、1987年9月、10-27頁。

<sup>31</sup> 劉虎如『史通(選)注』(初版は1928年。本稿は1967年台湾商務印書館版を利用)、曹聚仁前掲書。両書の出版について、北京図書館編『民国時期総書目(1911-1949)』上冊一歴史・伝記・考古・地理、書目文献出版社、1994年、105-106頁を参照。

<sup>32</sup> 呂思勉『史通評』、上海商務印書館、1934年；洪業「史通点煩篇臆補」、『史学年報』、2卷2期、1935年9月、149-160頁、後に氏の『洪業論学集』、中華書局、1981年所収、140-149頁；趙仲邑「劉知幾史通自叙註」、『國文月刊』、28-30期、1944年11月、66-81頁；程千帆「文論要詮」はもともと1940年代末に開明書店より出版されたが、今は莫礪鋒(編)『程千帆選集・上』、遼寧古籍出版社、1996年に所収、584-673頁；洪業(William Hung)，“A T'ang Historiographer's Letter of Resignation”，5-52；川勝義雄『史学論集』、朝日新聞社、1973年、179-228頁；Stuart H. Sargent，“‘Understanding History: The Narration of Events’ by Liu Chih-chi (661-721)”，in George Kao ed., *The Translation of Things Past: Chinese History and Historiography* (Hong Kong: The Chinese University Press, 1982), 27-33. この内、趙氏の注釈文も「萬曆刊本」を利用している。

中期から情況が逆転して、「自序」篇を訳注したGuy Gagnon “La postface personnelle de Liu Zhiji au *Shitong*: un essai d'ego-histoire ?” (1996年) があるものの、張振珮『史通箋注』(1985年)を始め、西脇常記『史通内篇』(1989年)、錢安琪・侯昌吉『史通選訳』(1990年)、趙呂甫『史通新校注』(1990年)、黃壽成(校点)『史通』・姚松と朱恒夫『史通全訳』(共に1997年)などの全訳や多数の選訳が続々と出版された。<sup>33</sup> 一方、訳・注に限らず、字句の校正・訓詁・評論を含むものとしては呂思勉『史通評』(1934年)から、楊明照「史通通釈補」(1940年)、陳漢章「史通補釈」・「史通補釈補正」(1929-1931年)、羅常培「史通增釈序」(1944年)、程千帆『史通箋記』・「史通内篇旧解訂訛」(共に1980年)及び氏と門人等「史通箋記拾遺」(1988年)、陳奇猷「史通通釈証誤」・張舜徽『史學三書評議』の「史通評議」(共に1983年)、

張振珮「史通内篇札記」(1990年)・「史通外篇札記」(1992年)などが挙げられよう。<sup>34</sup>

さて、伝承・受容史に関しては、何よりも鄭樵・章學誠の史學との比較研究が盛んであり、張其昀「劉知幾與章實齋之史學」、傅振倫「中國三大史家思想之異同」(1928年)、白壽彝「鄭樵對劉知幾史學的發展」(1963年)、甲凱「劉知幾與章學誠」(1974年)、蘇淵雷「劉知幾、鄭樵、章學誠的史學成就及其異同」(1979—1980年)、許冠三「劉章史學之異同」(1982年)、施丁「論劉知幾和章學誠之評司馬遷」・姜勝利「劉、章史識論及其相互關係」(共に1983年)、吳天任「劉知幾與鄭樵之史學之探討」(1989年)の諸篇があり、甲凱「史法與史意」(1977年)、倉修良「史德史識辨」(1979年)、瞿林東「史法與史意—從形式與內容的審視到思想的剖析」(1991年)、汪杰「淺論劉知幾章學誠關於歷史文學的理論」(1992年)のようなものもある。<sup>35</sup>

<sup>33</sup> 張振珮前掲『史通箋注』；西脇常記『史通内篇』、東海大學出版社、1989年；錢安琪・侯昌吉『史通選訳』、巴蜀書社、1990年；趙呂甫『史通新校注』、重慶出版社、1990年；黃壽成(校点)『史通』、遼寧教育出版社、1997年；姚松・朱恒夫(訳注)『史通全訳』、貴州人民出版社、1997年；Guy Gagnon, “La postface personnelle de Liu Zhiji au *Shitong*: un essai d'ego-histoire?”, in Soymie, M. Drège, J.P. ed., *De Dunhuang au Japon, Études chinoises et bouddhiques offertes à Michael Soymie* (Genf: Librairie Droz, 1996), 337-369 (その紹介文は *Orientalistische Literaturzeitung* 93[2][1998]: 244-249を参照)。

<sup>34</sup> 呂思勉前掲『史通評』；楊明照・陳漢章・羅常培の文章は共に上海古籍出版社『史通通釈』所収、611-745頁；程千帆前掲『史通箋記』・「史通内篇旧解訂訛」、《南京大學學報》、1980年2期、1980年5月、84-90頁；程千帆等「史通箋記拾遺」、南京大學古典文獻研究所編『古典文獻研究』、南京大學出版社、1988年、178-206頁；陳奇猷「史通通釈証誤」、《社會科學戰線》、1983年2期、1983年4月、173頁；張舜徽『史學三書評議』、中華書局、1983年；張振珮「史通内篇札記」、《歷史文獻研究》、新一輯、1990年、3-19頁；同「史通外篇札記」、《貴州大學學報》、1992年3期、1992年9月、72-76頁。陳漢章「史通補釈」について、丁紅「陳漢章遺稿考敘」(『文獻』、1996年2期、1996年4月、208頁)は氏の「史通内外篇補釈二卷」の「未刻稿本」を挙げているが、これは前述

のものを指すのではないと思われる。

<sup>35</sup> 張其昀「劉知幾與章實齋之史學」、《學衡》、5期、1922年5月、1-53頁(後にこの論文を「讀史通與文通義校讎通義」と改題して、『史地學報』、1卷3・4号に再掲)；傅振倫「中國三大史家思想之異同」、《新晨報・副刊》、1928年11月26-29日；白壽彝「鄭樵對劉知幾史學的發展」、《人民日報》、1961年4月6日；甲凱「劉知幾與章學誠」、《東方雜誌》、復刊8卷3期、1974年9月、53-56頁；蘇淵雷「劉知幾、鄭樵、章學誠的史學成就及其異同」、同『鉢水齋文史叢稿』、團結出版社、1989年、182-225頁；許冠三「劉章史學之異同」、《香港中文大學中國文化研究所學報》、13卷、1982年、45-69頁；施丁「論劉知幾和章學誠之評司馬遷」、北京師範大學史學研究所編『司馬遷新論』、河南人民出版社、1983年、381-395頁；姜勝利「劉、章史識論及其相互關係」、《史學史研究》、1983年3期、1983年9月、55-59頁；吳天任「劉知幾與鄭樵之史學之探討」、《東方雜誌》、復刊22卷9期、1989年3月、20-28頁；甲凱「史法與史意」、《輔仁大學人文學報》、6期、1977年6月、125-142頁；倉修良「史德史識辨」、《中華文史論叢》、1979年3輯、1979年9月、95-98頁；瞿林東「史法與史意—從形式與內容的審視到思想的剖析」、《文史知識》、1991年4期、1991年4月、56-63頁；汪杰「淺論劉知幾章學誠關於歷史文學的理論」、《西南師範大學學報》、1992年1期、1992年1月、75-80頁。



他に、蕭鳴籟「史通通釈体制略評」(1930年)、Koh Von Byongik (高柄翊) “Zur Werttheorie in der chinesischen Historiographie auf Grund des Shih-T'ung des Liu Chih-Chi (661~721)” (1957年)、増井経夫「清代史通学」(1962年)・“Liu Chih-chi and the *Shih-t'ung*” (1978年)、既述傅振倫『劉知幾年譜』、許冠三『劉知幾の実録史学』(1983年)、また、既掲石田論文「無窮会蔵・立原翠軒旧蔵史通評釈について一明末史通学の一端」、曾一民「唐兩通之撰作及其關係」(1987年)、林時民「史通削繁探析」(1990年)、西脇常記「宋代における史通」(1991年)、楊緒敏「論史通的流伝及其對後世史学理論的影響」(1992年)・「論劉知幾改造紀伝体史書的主張和影響」(1993年)、福島正「史通と資治通鑑」(1995年)は同類のものに属す。<sup>36</sup> 更に、内藤戊申「鄭樵の史論に就て」(1936年)や代継華「史書估畢の史学思想與歴史思想」(1995年)のように、鄭樵・胡應麟の史学を論じながら、『史通』の論説との異同を比較する研究も少なくない。<sup>37</sup>

研究史略類のものについて、内藤戊申「史通研究史略」(1961年)は1950年代まで日中兩國の研究概況を紹介したが、<sup>38</sup> 中国の場合は、前述の林時民『劉知幾史通之研究』「近三年来有関劉知幾的研究成果評介」及び彭雅玲『史通的歷史敘述理論』「史通的研究概況」が、その最初である。実際に、ある時期の研究大勢を鳥瞰するには、むしろ『中国歴史学年鑑』「史学史」の解説や中国史研究編輯部編『中国古代史研究概述』(1987年)、蕭黎主編『中国歴史学四十年』(1989年)、張榮芳「唐代史学史研究的回顧與檢討—以史学史專書为中心」(1991年)、喬治忠・姜勝利編『中国史学史研究述要』(1996年)の關係部分の回顧や紹介の方がより役に立つと言えよう。<sup>39</sup> また、海外の研究状況に関して、李潤和「韓国的中国史学史研究動向」(1994年)、謝保成「韓国近年来的中国史研究概況」(1997年)は共に『史通』關係の情報を提供している。<sup>40</sup>

ただし、以上紹介した版本・注釈・伝承・研究史略類のものは、先に挙げた『史通』に關す

<sup>36</sup> 蕭鳴籟「史通通釈体制略評」、『河南大学文学院季刊』、2期、1930年、87-92頁；Koh Von Byongik, “Zur Werttheorie in der chinesischen Historiographie auf Grund des Shih-T'ung des Liu Chih-Chi (661~721)”, *Oriens Extremus*, 4(1-2) (July, 1957): 5-51 & 125-181；増井経夫前掲文；傅振倫前掲『劉知幾年譜』；許冠三『劉知幾の実録史学』、第六・七章；石田肇前掲文；曾一民「唐兩通之撰作及其關係」、国立中興大学歴史系主編『第二屆中西史学史研討會論文集』、久洋出版社、1987年、77-100頁；林時民「史通削繁探析」、『（中国）書目季刊』、24卷1期、1990年6月、33-42頁；西脇常記「宋代における史通」、『中国思想史研究』、14號、1991年、31-64頁；楊緒敏「論史通的流伝及其對後世史学理論的影響」、『徐州師範学院学报』（哲学社会科学版）、1992年1期、1992年3月、69-72頁；同「論劉知幾改造紀伝体史書的主張和影響」、同前誌、1993年3期、1993年9月、39-50頁；福島正「史通と資治通鑑」、『中国思想史研究』、18號、1995年、1-39頁。

<sup>37</sup> 内藤戊申「鄭樵の史論に就て」、『東洋史研究』、2卷1号、1936年10月、1-13頁；代継華「試論史書估畢の史学思想與歴史思想」『重慶師院学报』（哲社版）、1995

年2期、1995年6月、105-111頁。

<sup>38</sup> 内藤戊申「史通研究史略」、『寧楽史苑』、9號、1961年4月、1-9頁。

<sup>39</sup> 林時民『劉知幾史通之研究』、179-188頁；彭雅玲前掲書、4-8頁；張榮芳「唐代史学史研究的回顧與檢討—以史学史專書为中心」、『東海学报』、32卷、1991年6月、141-154頁；謝保成「史学史」、中国史研究編輯部編『中国古代史研究概述』、江蘇古籍出版社、1987年所収、489-491頁；施丁「中国史学史」、蕭黎主編『中国歴史学四十年』、書目文献出版社、1989年所収、586-597頁；喬治忠・姜勝利編『中国史学史研究述要』、天津教育出版社、1996年、121-125頁；吳懷祺「近兩年來史学史研究鳥瞰」、『中国史研究動態』、1994年8期、1994年8月、8頁；李紀祥「台湾地区『史通』研究之回顧（1949-1994）」、『國立編譯館館刊』、25卷1期、1996年6月、101-134頁。

<sup>40</sup> 李潤和「韓国的中国史学史研究動向」、『中国史研究動態』、1994年6期、1994年6月、17頁、謝保成「韓国近年来的中国史研究概況」、同誌、1997年2期、1997年2月、23頁。

る論文・著作全体の大凡五分の一に過ぎず、『史通』研究の手薄な部分といえるであろう。このような研究状況に至った原因は、まず、いわゆる宋版を利用した『通釈』は本文の解説と出典の注釈が先の注釈本より詳しくて、『史通』の定本のように通行していた。一般の研究者にとって、善本や学者の校勘記録及び研究を広く利用できないので、『通釈』の「妄改妄刪」また『史通』の版本問題を研究テーマとするのは殆ど不可能である。次に、史学評論史(History of Historical Criticism)という概念を史学史(History of Historiography)と区別して、特に『史通』の受容を史学評論史の発展の主軸と意識しないと、本書の伝承史を究明する価値も理解できないと思われる。筆者が版本・伝承等に重点を置く一因も、ここにある。

本節を終えるにあたり、1990年代以降の劉知幾や『史通』研究の新動向に触れたい。劉氏の生涯に関して、従来年譜類しかなかったが、1990年代になって許凌雲『劉知幾評伝』(1994年)と趙俊・任寶菊『劉知幾評伝—史学批評第一人』(1997年)によってその状況は打ち破られた。福島正『劉知幾の息子たち(上)』(1993年)は更に劉氏ではなくその子孫を紹介の主体とした。林時民『史学三書新詮：以史学理論为中心的比較研究』はいままでの劉知幾・鄭樵・章学誠に対する研究を集大成するものと言ってもよいが、章学誠の『史通』観の変遷についてはまだ十分に説明し尽くしていないと思われる。稲葉一郎『中国の歴史思想—紀伝体考』(1999年)はその名の通り、紀伝体(史)の考察を主幹として、唐代までの中国の歴史叙述形式とその展開などの問題を取り扱っているが、

『史通』に関する論説はその中の一章である。より本稿の研究方向と共通点があるのは、西脇常記『唐代の思想と文化』(1999年)であるが、特に本稿において詳細に紹介できなかった宋代における『史通』の伝承に関する部分は参考になる。<sup>41</sup>

### 三 『史通』学の反省と提案

本稿が冒頭で述べたように、版本の異同がどの程度『史通』の内容の理解に関わっているのか、という問題は極めて重要である。筆者は嘗て、日本・中国大陆・台湾それぞれの図書館の善本目録と個人の実際の調査に基づいて「現存『史通』版本一覧表」を作成し、明清両代の諸版本(善本を中心として)の種類・特徴と蔵所を列挙して、近世における『史通』学の発展の大勢と筆者の関心点を説明する。<sup>42</sup> この表によって、従来ほぼ空白の状態にとどまっていた乾隆以前及びその後における『史通』の伝承を究明することができた。その中でも、清代に流通していた『史通』の多くの版本は今日でも現存する。全般に言えば、清代の著名学者の批校を施した善本は専ら中国大陆の国公立学術機構また各大学の図書館が独占している。にもかかわらず、基本的な研究史料としての諸刊本が台湾でも日本でも利用できる。そのうち、最も筆者の注意を引いているのは、明清以来の公私書目共に著録されていない、現在台湾国家図書館所蔵の「烏絲欄本」という鈔本である。その理由は、宋版『史通』は清初以降すでに伝わっていなかった一方、上述の諸善本と校勘すると「烏絲欄本」で内容の異なる箇所が多くは、明清の

<sup>41</sup> 許凌雲前掲『劉知幾評伝』；福島正「劉知幾の息子たち(上)」、『大谷女子大國文』、22巻、1992年、36-46頁、未見、後に『中国關係論說資料』、35巻3冊上、1993年所収、36-46頁；林時民前掲『史学三書新詮：以史学理論为中心的比較研究』；稲葉一郎『中国の歴史思想

—紀伝体考』、創文社、1999年；西脇常記『唐代の思想と文化』、京都大学博士論文、1999年；趙俊・任寶菊前掲『劉知幾評伝—史学批評第一人』、179-183頁。

<sup>42</sup> 拙著『中国近世史学評論史研究—『史通』学を中心に』、京都大学博士論文、2000年、35-39頁。

校勘者が見た宋版に関する記事との一致性を示している、と思われることにある。しかし、この鈔本が初めて洪業により紹介されて以来、三十数年たった現在においても、なお長期にわたり無視されている。<sup>43</sup>『史通』の研究者にとって今後の大きな課題は、この鈔本を書誌学的な角度から説明して、宋本との関係や『史通』研究上のこの鈔本の価値と重要性を論じるものである、と考えている。また、この鈔本に基づいて張振珮『箋注』・趙呂甫『新校注』・姚松と朱恒夫『史通全訳』の内容を再校訂したり、『史通』の古本の復原による本文の新解釈を行ったりすることも重要であろう。<sup>44</sup>

次に、明末清初から民国までにかかる『史通』の著録・注釈・評論の全貌を明らかにする作業は、「中国近世史学評論史」の建設を進めようとする考えに基づくものである。梁啓超『中国歴史研究法』は、中国伝統的な史評を史跡と史書を批評することを区別し、後者を「評す所即ち歴史研究法の一部を為す」「以て史学の建設を頼む所」だ、と強調している。また、氏は「自ずから左丘・司馬遷・班固・荀悦・杜佑・司馬光・袁樞諸人あり、然る後中國に始めて史あり。自ずから劉知幾・鄭樵・章學誠あり、然る後中國に始めて史学あり矣。」<sup>45</sup>

この論説は、史学評論が理論・方法の一つ形として、史学の建設に重要な支えとなることと、劉知幾が史評の代表者だ、と認めている。そこで、史学評論史自体の内在発展を探究するために、『史通』学の成立及びその特徴を考察するのはその第一歩だ、と言わざるを得ない。

最近まで、清代の『史通』校勘・注釈・評論と言え、おおそ何焯・黄叔琳・浦起龍・盧文弨・紀昀・顧廣圻・傅增湘の数人しか挙げられなかった。何焯より時代的に先立つ馮舒が『史通』に批校を施したことについては、僅かに盧文弨『拾補』や『四部叢刊』本『鼎本』の附す顧廣圻の校勘記などに断片的に引かれるものが知られるのみであった。馮舒と、同時代の錢陸燦が虞山学派の代表者として、それぞれ『史通』の論説を完膚無きまでに批判した意見などはまだ十分に紹介されていない。また、何焯の成果について言えば、盧文弨が採用しているのはただ彼の文字校勘の部分のみ、何焯の経・史学の立場をも論点にとらえた思想的な批判はほとんど見られない。このような事実を知れば、これらの新史料によって彼らを対象とし、従来史学史研究者があまり触れていない清代初期における史学評論の発展と特徴の一側面を窺うことができるであろう。一方、乾隆中期

<sup>43</sup> 氏は“A T'ang Historiographer's Letter of Resignation”が言う、“Through the help of Mr. Wu Chi-hua 吳緝華 of Academia Sinica, I have come to realize that the text of *Wu-szu-lan ch'ao-pen Shih t'ung* 烏絲欄鈔本, ‘*Shih t'ung*, hand copy on black-lined paper,’ bears a close relationship to *Shih t'ung Shu* (『蜀本』:筆者案) on the one hand and to *Shih t'ung* (『象本』:筆者案) on the other…My speculation is that it might have represented an attempt, circa 1500, with the help of some manuscript or manuscripts, to reedit the text of *Shih t'ung Shu* so that it might be more readable and might be taken to be a Sung (宋:筆者案) Edition.” (46)

<sup>44</sup> 張振珮は秦柱の「宋本」に基づく『象本』を重視して底本とし、明清・民国の主な刊本・学者の校勘記録及

び研究を一括利用し『箋注』を書いた。この書は張三夕・石田肇両氏の評価通り、現在でも参考しなければならないものである。一方、『新校注』と『史通全訳』は『箋注』と同類の著作で、新な解説も若干提出した。しかしながら、注釈上不十分な点があるのは別として、三書の最も顕著な欠点は簡体字印刷なこと、特に原文の校勘に大きな障害となっている。

<sup>45</sup> 梁啓超『中国歴史研究法』(氏の『梁啓超史学論著三種』所収、三聯書店、1984年)第二章:「史評有二、一、批評史跡者、二、批評史書者。……批評史書者、質言之、則所評即為歴史研究法之一部分、而史学所頼以建設也。自有左丘、司馬遷、班固、荀悦、杜佑、司馬光、袁樞諸人、然後中國始有史、自有劉知幾、鄭樵、章學誠、然後中國始有史學矣。」(頁68-69)。

以後から民国の初めまで、『史通』伝承の主な荷い手は黄丕烈・陸心源・丁丙らを始め、盛昱・傅增湘・鄧邦述・呉慈培・葉景葵ら、蔵書家にあったと言えよう。彼らは『史通』の善本を集めながら、徐承礼・唐翰題・丁晏・羅振常・繆荃孫・孫毓修らの学者にそれらを利用させた。徐承礼・楊守敬・翁同龢らの校訂成果、特に何焯・盧文弨・浦起龍・紀昀・顧炎武の誤謬ないし注釈していない箇所に対する補訂は、今日の『史通』研究者にとって役立つものが少なくない。<sup>46</sup>

第三に、史学評論の発展と社会・教育との関係という点から考えると、科举試験の中の「史学策」において、『史通』の取り扱う史学問題が頻繁に引用されるようになるにつれて、その重要性が受験者の間で高くなっていったのは当然のことである。一般の受験者にとって、『東萊博議』・『十八史略』・『讀史管見』・『綱鑑合編』等の歴史勉強の手引き書はいくまでもなく、たとえ『史記』・『漢書』・『通鑑』などの名著をいくら読んだとしても、それらの書物が提供する一般的な歴史知識では史学策に対応するのは容易ではなかった。むしろ、受験者が欲しいのは一種の評論・分析の見方により古今の史学・史家・史書の発展・特徴・優劣を詳細に紹介するものであろう。これこそ『史通』が少数の学者を初め、知識人の間で益々広く読まれるようになった根本的な原因であると思われる。本来、科举試験のために、四書・五経を優先して、それを精読し終った段階の約17-18才以後史書の模範と認められている『通鑑』・『史記』・『資治通鑑綱目』を読みながら、古文・諸子百家を汎読する順番は理想的かつ普通のやり方であった。両宋以来の儒家の正統とされる理学の思想

と合わない『史通』は、常にこの勉強範囲外のものとなっていた。ところが、明の中晩期以後、『史通』の刊行が多くなると同時に、読者がより若い頃からこの書物を教材として読み始めるようになり、特に清中期以降、『史通』が一部の地方書院の教材にもなっていた。<sup>47</sup>

第四に、増井経夫によれば、雍正・乾隆間に続発した「文字の獄」によって文人の筆は制約され、たとえ研究対象が古典でも、そして仕事に注釈に過ぎないものであったとしても油断はできなかった、と言う。そして、浦起龍は、『史通』の本質を道学を宣布し名教を護持するところにあったと解し、悪名高い「疑古」・「惑経」篇も賢聖や經典を侮辱したものではなく、真意は篡奪叛逆に憤りを寄せるための発言であったと考えたが、両篇の本質的な矛盾、つまり名教への背馳は多くの文人にとって明瞭なので、そのまま放置することはできなかった。従って、ついに紀昀は両篇を削ったが、これは名教のための「脚を斬って、履に合わせる仕事」であり、その「帯びて現われた」「新たな使命」である、と論じた。<sup>48</sup> 筆者は氏のこの「使命」説や前述Guy Gagnonの「政治審査説」を再検討するために、以下の問題は究明しなければならない。すなわち、①紀昀の方法の先駆をなす尹嘉銓の思想とその文字の獄の経緯をめぐる乾隆朝の名教観、②清初以来朝廷側と知識人が正統思想と合わない書物をどのように取り扱ったか、③『削繁』の編纂と紀昀の思想の独自性、及び『削繁』の出版後の反響を検討する、という3点である。この3点を総合的に研究したうえで、筆者は『史通』のような古籍を削除することが知識人（特に高級知識人）の自発的かつ極端な行動に属して、思想統制と直接な関係がな

<sup>46</sup> 拙著『「史通」善本綜述：以明清兩代刊本・鈔本為中心』、『明清史集刊』、第5卷、2001年、269-321頁。

<sup>47</sup> 拙著「史学評論與政治—從清朝的『史通』学談起」、

単周堯（主編）『明清学术研究』、中国社会科学出版社、2009年、306-314頁。

<sup>48</sup> 増井経夫「清代史通学」、327頁。



いと思われる。それに、結果として、その作業の多くは悪評を受けた。<sup>49</sup>

第五に、清代史学評論の代表者として章学誠がいった。章氏は清代の劉子玄とされ、彼以上に『史通』の史学理論の価値と長短処をよく理解して、その論説を受け入れながら独自の史学体系を打ち立てた史家はいないであろう。従来、『史通』の研究者は劉知幾が章氏に与えた影響を極力証明しようとしてきたが、『文史通義』の研究者は常に章氏の独創性を強調しようとしてきた。一方、劉章二氏（或いは鄭樵も加えられる）の史学を比較する研究も幾つかあるが、「時代の屈折を十分顧慮せずに直接に比較しようとする不用意さは蔽えない」という欠点がある。<sup>50</sup> また、このような研究は主に二人の主張を同一平面上に並列するに止まり、章氏本人の中で、彼の学問が深まるにつれて『史通』に対する見方がどのように変化したか、について探求したものは少ない。従って、筆者は次の角度からこの問題について研究する必要があると考えている。つまり、

①三十代半ばまでの『史通』観。章氏が当時一世を風靡していた經学考証に転向しなかったのは、『史通』に頼りを見付けたからであると考えられる。この段階では、彼は『史通』が取り扱っている歴史編纂の凡例・体裁の問題のみを学問の道として選んだと考えられる。

②変遷の第一歩としての地方誌の編纂。36-37才前後になって、『和州志』や『永清縣志』・『亳州志』などの編纂が契機となり、章氏がこれにより実際の史書編纂の経

験に基づいて『史通』の論説を批判し始めた。

③変遷の第二歩としての「史徳」説の発明。

乾隆五十六年（1791）の「史徳」篇の論説は『史通』の「史才の三長」説の欠点をずばりにつくものとされたが、その重要性は、前年に著された戴震批判論の「書朱陸篇後」に溯らなければはっきり分らない。<sup>51</sup>

一方、『乙卯劄記』・『丙辰劄記』・『史籍考』などの著作によれば、章学誠が晩年になっても常に劉知幾の議論を念頭に置いていたことが分かる。上述のように、章氏の『史通』観の変遷はその学問の成熟過程に伴って幾つかの段階に分けることができる。にもかかわらず、その変遷の中において終始一貫しているのは劉知幾に対する彼の尊敬の念である。

最後に、日本での『史通』の受容を中国の史学評論が漢字文化圏諸国に何処まで影響を与えたのか、と究明する第一歩として、十分な意義があるものと思われる。森克己が平安時代末期における日宋交通についての研究で述べているように、『史通』は12世紀の半ばに、日本の学者に読まれていた可能性があるようである。<sup>52</sup> 徳川時代における『史通』の伝承と受容について、従来研究者が注意したのは、猪飼彦博・山鹿素行・立原翠軒等三人に過ぎなかった。筆者が調べたところによると、林恕『鵝峰文集』に収録されている「論史通寄函三弟」は、現時点でわれわれが知り得る同時代の『史通』観に関する最も整った論説であるかもしれない。<sup>53</sup> この手紙は庚子の年則ち萬治三年（1660）に書

<sup>49</sup> 拙著「史学評論與政治—從清朝的『史通』学談起」、298-306頁。

<sup>50</sup> 増井経夫「清代史通学」、頁327。

<sup>51</sup> 章学誠著、倉修良編『文史通義新編』、上海古籍出版社、1993年、76-78頁。

<sup>52</sup> 森克己「日唐・日宋交通に於ける史書の輸入」、史学会『本邦史学史論叢』、富山房、1939年、459-460頁。

<sup>53</sup> 林恕『鵝峰林学士全集』元祿二年序刊本、『鵝峰文集』卷39、8下-12上頁。

かれたものであるが、それによると、鵝峰が「官版」『史通』を読んだのは萬治元年（1658）の夏であり、これは『山鹿語類』の完成した寛文五年（1665）より早い。また、近世から近代まで日本の教育史上、中国と同様に『史通』を基本教材の一つとしたことはあったであろうか。この問題に関しては、尾張藩鷺津宣光の『明倫堂読書階級』の一例を挙げておく。『史通』が明倫堂の課程に納められたのは、維新の前後に伝統教育を改革しようとしたというよりは、鷺津が若い頃に猪飼彦博に師事したというかわりからの方が、十分に納得できるであろう。<sup>54</sup> 従って、猪飼・鷺津系統の学者の著作をより全面的に調べる作業は、江戸時代におけるこの書物の受容史を明らかにする上で重要な一歩と思われる。

## おわりに

以上、本稿はまず『史通』の版本知識・伝承と受容の歴史に関する先学の業績を検討し、その誤りを指摘しながら、『史通』学の建設の重要性を明らかにした。次に、合計250点以上の論文及び専門著作を基礎として、版本研究、注釈・翻訳、伝承・受容史、研究史略類のもの、それぞれを分けて20世紀における『史通』研究史略を回顧した。最後に、筆者は版本・伝承等『史通』研究の手薄な部分に対して、今後の『史通』学研究を中国近世史学評論史という視座で位置づけべきだと提案し、その最も重要な課題を挙げている。21世紀の『史通』研究を推進するのに、本稿が何らかの参考になることを望みたい。

---

<sup>54</sup> 『国史大辞典』編集委員会編『国史大辞典』、吉川弘文館、1993年、巻14、408-419頁。